

◇◇◇◇◇  
卷頭言  
◇◇◇◇◇

## 九州工業大学と情報科学センターの明るい未来について

鶴 正人<sup>1</sup>

前任の堀江知義センター長が入試担当副学長に就任されたことに伴い 2010 年 4 月に私が情報科学センター長を拝命してから、もう 6 年が経つ。この間、大規模な災害の発生や社会・経済の閉塞感の蔓延が続き、大学を取り巻く状況も、財政状況の悪化や情報セキュリティ問題の深刻化のような「負」の印象ばかりが残っている。しかし、実際はそれだけではなく、様々な努力の成果としての「正」の改革によって、質が改善された事、効率的になった事、便利になった事、などもたくさんあった。

情報科学センターでも、変化と危機に対応できる情報基盤の整備を目指して、正負の両方への対応を行って来た。主な関連事項として、情報基盤機構の設立（本センターは機構内の一組織）、機構内の運用室によるネットワークセキュリティ管理強化、全学統合 ID システムの整備、教育用計算機システム（情報工学教育研究用コンピュータシステム）のレンタル更新、通信基盤ネットワーク（全学セキュア・ネットワークシステム）のレンタル更新、全学の無線 LAN 環境の整備・拡充、生涯メールの導入とクラウド・メール化、国際化への対応（説明文の英語化や海外サテライト施設の立ち上げ支援など）が挙げられるが、これらはもちろん、センター職員だけではなく、関連する各種委員会・作業部会・仕様策定・利用者グループのメンバーや関連する事務部・技術部のメンバーとの共同作業として、さらに執行部のご支援と全学の皆様のご理解・ご協力（忍耐）によって、成立した。この場を借りて、厚くお礼を申し上げます。

しかし、これらのどの事項も、完成したら最終形が得られ、後は保守・運用すればいい、というものではない。日常の保守・運用業務に加えて、世の中や学内の状況の変化に応じるための改変が続き、永久に完成しないものである。その意味では、何か古いものを捨てない限り、業務がどんどん増え続ける。引き続き全学的なご理解・ご協力が不可欠である。

さて、第 3 期中期計画が始まり、教養教育院が設立され、本格的な学部改組も動き始めた。入試の大変革も予定され、国際化の流れもますます加速する状況である。こうした激流の中で、九工大と情報科学センターの明るい未来について考えてみたい。九工大の強みは、基礎を重視した教育、実学的・工学的な研究、伝統と自由な気風の適度なバランス、それらに支えられた高い学生就職率などが挙げられるが、情報科学センターは、

(1) 最先端の情報基礎教育のための環境

(2) 大学の多様な活動の高度化・効率化のための最先端の情報基盤環境

の整備に関して、それらに貢献してきた。ただし、「最先端」というのは単に新製品という意味ではなく工学的にみて有効な先端性を有することを指す。学生が最先端の情報基礎教育を受け、職員が最先端

<sup>1</sup>情報科学センター長 tsuru@cse.kyutech.ac.jp

## 卷頭言

の情報基盤環境を利用すること、全学生・全職員がそれを使いこなす「ICTハイテクな工科大学」というイメージを獲得することは、今後の本学の強みとなりうる。

ここで、先端性の確保・高度化・効率化のためには、集中管理・統合化の更なる拡大が不可欠である。今は各部局がばらばらに実施している部分も、今後は全体最適化の中で進めることが必要になる。その場合、今の体制だけで支えることはできず、整備・運用にも多くの人の関与が不可欠になる。また単純化した運用が可能なものは、コスト効率の面から外部委託・外部サービスの利用も検討していく必要がある。よって、情報科学センターの存在意義は、(1)や(2)の運用が出来ることではなく、これらの整備・運用に関してプロフェッショナルなスキルや姿勢を持ち、それらの先端性に関して、常に調査・実験を行い、導入の検討・計画・管理ができ、新技術の運用に関する指導を行える人が居ることだと考える。(1)や(2)の先端性はますます高度化するため、研究としてその技術に深く携わっている教員との連携も重要になる。また、先端性の確保には、準備も含めたコスト負担が前提になる。

つまり、未来像として、情報科学センター自体は、より技術的専門性を高め、他の学内センターとも連携・役割分担しながら、人材育成や研修機能を強化し、一方、(1)や(2)の運用は、その運用母体を統制の取れた形で全学に拡大し、兼務する教員・技術職員・事務職員への研修を含めた協力体制で実現する、という形態を目指せないか、例えば、技術職員や事務職員が情報科学センターに数ヶ月出向して技術を習得するという制度も検討の余地があるのではないか、と妄想する。運用レベルを担保できる体制を伴って運用母体を大きくすることができれば、スケーラビリティの向上が期待できる。一方、全く別方向の意見やアイデアもあるだろう。いずれにせよ、情報基盤の運用や情報科学センターの未来像に関する検討は、私の力不足で任期内に進めることができなかつた。新中期計画の期間内により踏み込んだ議論になることを願っている。

最後になりましたが、この6年間に情報科学センターや関連する活動でお世話になった、あるいはご迷惑をかけたすべての方にお礼とお詫びを申し上げて、センター長退任の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。